

## 【表紙シリーズ】

## 房総の森ときのこと その6

## 「海岸のきのこ」

吹春 俊光

今回は海岸のきのこです。海岸には独特のきのこ類がみられるため、数多くの研究がなされてきました(2012 竹橋ら; 糟谷 2020)。「dune fungi」などで検索すると多くのサイトがヒットします。

海岸は生物にとって過酷な環境です。きのこは栄養を他に依存するため、有機物の少ない場所(砂浜)や共生生物のいない場所(樹木が生えていないところ)での暮らしは大変です。おまけに海岸は海水の塩分による水ストレスもあります。また海岸の環境は、例えば海岸線と表現されますが、波打ち際からマツが植栽されているところまで、すなわち「1波打ち際」、「2砂浜」、「3コウボウムギやハマヒルガオの植生帯」、そして「4マツの植栽帯」まで、ある程度の幅をもったいくつかの異なる環境に分けられ、それぞれに独特のきのこが見られます。

千葉県が位置する房総半島は、東京湾と太平洋にはさまれた長い海岸線にかこまれており、かつては多様で自然な海岸が見られました。現在では人為的な影響により自然な海岸はほとんど消滅し、自然な砂浜海岸は山武市蓮沼や富津市新舞子にわずかに残され、そこに海岸でしか見られないきのこ類が見られます。

ここでは、その中からマツの植栽帯にいくまでの、「2砂浜」(スナジクズタケ)や「3コウボウムギの植生帯」(スナヤマチャワンタケ、コナガエノアカカゴタケ、ウネミノケシボウズタケ)に見られるきのこを紹介します。ここで紹介した他にも、スナジアセタケ *Inocybe niigatensis*、スナジホウライタケ *Marasmiellus mesosporus* などが房総から知られています。

記録に示した「FA-」「FB-」は、すべて千葉県立中央博物館(CBM)に所蔵された標本です。



富津市八幡新舞子  
2015年11月7日

●スナヤマチャワンタケ

*Lamprospora ammophila* (Saut.) Boud.

(ピロネマ科, チャワンタケ目/子囊菌類)

千葉県ではおもに冬の時期、11月から1月にかけて、自然な砂浜海岸の、コウボウムギなどの植生帯に見られます。直径5cm程の茶碗状、砂からいきなり出ている姿はびっくりです(写真上左)。砂に埋もれていることもあり、穴があいたようにも見えます(写真下左右)。種小名の「*ammophilus*」は「砂地を好む」という意味です。現在、日本産種には欧州の学名が採用されています(大谷 1982)。ここで紹介する種類はみなそうですが、海流によって汎世界的に遺伝的交流がおこなわれている可能性のある海岸の生物は、欧州産とアジア産が同種という可能性も大きいのですが、欧州産と日本産やアジア産種の検討は必要かもしれません。○記録(博物館, 4件): FA-35190, 2004



↑ 富津市八幡新舞子、2015年11月7日、  
← FA-41645



発生の様子: 富津市八幡新舞子、2016年1月10日、FA-41665

年11月10日, 野栄町野手浜; FA-36307, 2006年1月5日, 山武市南浜(蓮沼海岸); 2006年5月26日, 蓮沼海岸(糟谷 2007); FA-41645, 2015年11月7日, 富津市八幡新舞子; FA-41665, 2016年1月10日, 富津市八幡新舞子; 2016年12月5日, 富津市八幡新舞子(山本 2017)。

●スナジクズタケ

*Psathyrella ammophila* (Durieu & Lév.) P.D. Orton

(ナヨタケ科, ハラタケ目, 担子菌類)

ここで紹介した種類のなかでは、最も海岸線に近いところに見られる種類で、砂からいきなり発生しているのをよく見かけます。砂の中の埋もれた植物遺体や流木などが栄養源なのでしょうか。本種も房総では10月後半の晩秋から12月の冬にかけてみられるようです(浅井郁夫 2022; 「きのこ雑記」 [http://fungi.sakura.ne.jp/ajiwai\\_kinoko/sunajikuzutake.htm](http://fungi.sakura.ne.jp/ajiwai_kinoko/sunajikuzutake.htm), accessed 7 Mar. 2022)。本種も欧州学名が採用されていますが(Kits 1977, 1985; Wächter & Melzer 2020)、日本産種の検討もやってみる



富津市八幡新舞子、2016年1月10日、  
FB-41664

価値があるかもしれません。

○記録 (博物館, 2件) :FB-41646, 2015年11月7日, 富津市八幡新舞子 ;FB-41664, 2016年1月10日, 富津市八幡新舞子 ;2016年12月5日, 富津市八幡新舞子 (山本 2017)。



富津市八幡新舞子  
2015年11月7日、  
FB-41646

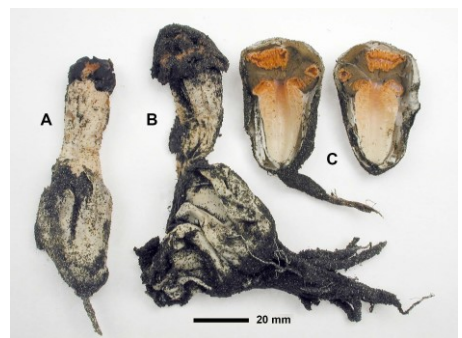
●コナガエノアカカゴタケ

*Lysurus periphragmoides* (Klotzsch) Dring (スッポンタケ科・目, 担子菌類)

柄のついたアカカゴタケ風の姿をしている本物の珍菌です (写真上左右)。若い幼菌は全体が白色の外皮に包まれた卵形、幼菌の断面をみると (写真下C)、外皮の内側に中皮 (半透明寒天質)、その内側に伸長前の托 (下)、基本体 (グレバ) (上) が、内皮に包まれ畳まれた状態で格納されています。成熟すると、外皮の外に托 (柄に相当する長い円筒形の柱の部分) を伸ばし、全体が5~10cmとなり、托の上部には穴のあいたカゴ状網目の赤い頭部があらわれ、その網目の間と網目をつくる腕の内側に、胞子を含んだ暗緑色・粘液質のグレバ (基本体) が付着しています (写真下AB)。このように書いてみるとやっぱり本当に珍菌です。房総で発生する季節は春から夏 (4月~6月)、そして秋から冬 (10月~1月) のようです (浅井郁夫 2022 ; 「きのこ雑記」 [http://fungi.sakura.ne.jp/ajiwai\\_kinoko/konagaeno-akakagotake.htm](http://fungi.sakura.ne.jp/ajiwai_kinoko/konagaeno-akakagotake.htm), accessed 7 Mar. 2022)。学名はDring (1980), 糟谷 (2007 a) に従いました。熱帯 (Dring 1980) から亜熱帯の汎世界分布種で、房総に亜熱帯要素の生物が見られることを示しています。



いすみ市岬町江場土 (夷隅川河口和泉浦)  
2012年11月1日撮影: 柳健介



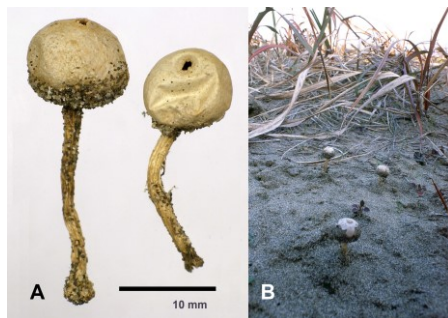
A・B: 成菌、C: 幼菌  
長生郡一宮町 2001年12月6日、FB-30924

○記録 (博物館, 3件) :1999年7月20日, 2006年12月6日, 富津市八幡新舞子 (飯塚 2007、採集地は私信による) ;FB-30924, 2001年12月6日, 長生郡一宮町 ;2012年11月1日, いすみ市岬町江場土 (夷隅川河口和泉浦) ;FB-43294, 2016年11月27日, 長生郡一宮町太東 ;2016年12月5日, 富津市八幡新舞子 (山本 2017)。浅井郁夫さんのウェブサイト「きのこ雑記」には、一宮町、富津市、長生村、白子町で観察された本種の沢山の写真が掲載されています。

## ●ウネミケシボウズタケ

*Tulostoma striatum* G. Cunn. (ハラタケ科・目)

ケシボウズタケ属も珍菌です。Wright (1987) は世界から139種を報告しており、日本からは7種類(6種1変種)が(Asai and Asai 2008)、千葉県からは2種類が知られています。柄がついたホコリタケ風の不思議な姿をしており、砂の中で丸い幼菌として成長し、成熟すると柄が伸長し、頭部と柄の上部が地表に出てきます。頭部は径8~16mm、柄は25~50×2~5mm。殻皮は2層、外皮は砂粒を巻き込み、頭部下側に砂粒をつけた状態で、時に房飾状に残ります。「うねみの」の意味は、孢子表面に明瞭に隆起した肋骨状の刻紋をもっているところに由来します(浅井 2004)。野外では砂の表面に丸い頭部しか出てないことが多く、まるでウサギの糞のような風情です。房総では夏から冬(8月~3月)にかけて見られます(浅井郁夫 2022; 「きのこ雑記」 [http://fungi.sakura.ne.jp/ajiwai\\_kinoko/unemikesibouzutake.htm](http://fungi.sakura.ne.jp/ajiwai_kinoko/unemikesibouzutake.htm), accessed 7 Mar. 2022)。北米、南米、豪州等に分布し、日本では本州(新潟、福島、石川、千葉)のコウボウムギなどが生える海浜砂地にみられます。房総には同様な海岸の環境に同属のナガエノホコリタケ(=ナガエノケシボウズタケ、*Tulostoma fimbriatum* Fr. var. *campestre* (Morgan) G. Moreno) の発生も知られています。○記録(博物館, 9件): 山武市(蓮沼) (FB-30241, 2000年11月26日; FB-33829, 2003年10月20日; FB-33833, 2003年2月6日; FB-33838, 2003年9月7日); 匝瑳市(野手浜) (FB-33832, 2003年10月20日; FB-33834, 2003年11月7日; FB-33836, 2003年3月21日); 富津市(新舞子) (FB-33835, 2003年8月19日; FB-33837, 2003年10月3日)



A: 山武市(蓮沼)、2000年11月26日、FB-30241、B: 匝瑳市(野手浜)、2003年10月20日、FB-33832

## 【文献】

- 浅井郁夫 (2004) 日本産 *Tulostoma striatum* について. 日菌報 45: 11-13.
- Asai I and Asai Y (2008) New records of two *Tulostoma* species from Japan. Mycoscience 49: 399-402.
- Dring DM (1980) Contributions towards a rational arrangement of the Clathraceae. Kew Bull. 35: 1-96.
- 飯塚茂明 (2007) 私流の標本作製法-家庭で作れるきのこのフリーズドライ. 千葉菌類談話会報 22: 10-13.
- 糟谷大河 (2007a) 東海村の菌類. 東海村の自然誌(東海村の自然調査会編). 東海村教育委員会, 東海村, pp 147-179.
- 糟谷大河 (2007b) 千葉の砂浜の思い出. 千葉菌類談話会報 22: 6-9.
- 糟谷大河 (2020) 日本の砂浜海岸における担子菌きのこの分類と系統に関する研究. 日菌報 61: 45-61.
- Kits van Waveren E (1977) Notes on the genus *Psathyrella*-V. The sections *Anmophilae*, *Bipellis* and *Subatratae*. Persoonia 9: 199-231.
- Kits van Waveren E (1985) The Dutch, French and British species of *Psathyrella*. Persoonia Suppl 2: 1-300.
- 大谷吉雄 (1982) 興味深い日本産チャワンタケ2種について. 日菌報 23: 379-384.
- 竹橋誠司・星野保・糟谷大河 (2012) 石狩砂丘と砂浜のきのこ. NPO法人 北方菌類フォーラム, 札幌
- Wächter D and Melzer A (2020) Proposal for a subdivision of the family Psathyrellaceae based on a taxon-rich phylogenetic analysis with iterative multigene guide tree. Mycological Progress 19(11):1151-1265. DOI: 10.1007/s11557-020-01606-3
- Wright JE (1987) The genus *Tulostoma* (Gasteromycetes) - A world monograph. Biblioth. Mycol. 113: 1-338.
- 山本充弘 (2017) 砂地のきのこたち. 千葉菌類談話会報 33: 5-9.